

山陽女子短期大学臨床検査学科における国際交流活動

椋 清美*[§] 小野寺 利恵* 岡村 美和*

はじめに

山陽女子短期大学臨床検査学科は、外部の国際交流プログラムを活用し、和歌山県臨床検査技師会 HIV/AIDS 対策海外人材育成研修(タイ)、大韓臨床病理士協会総合学術大会(韓国)、語学研修ホームステイ(ニュージーランド)などに参加し国際交流活動を行ってきた。本稿では、2019年度に臨床検査学科独自に実施したラオス海外研修について紹介する。

I. ラオス海外研修実施に至る経緯

以前、筆者が勤務していた医療系 NPO 法人ラオス事務所では、母子の健康増進を目的として地域保健活動、災害救急医療支援、保健人材育成支援を中心に活動を行っていた。保健人材育成支援では、現地の医療従事者や村の保健ボランティアに対して研修会や実務指導を行い、知識・技術の向上を目指した活動を実施していた。また、将来、医療従事者や国際機関職員を目指す大学生の海外研修を受け入れ、活動紹介、病院見学、フィールド見学、市場見学などを通して、開発途上国の現状を体感できる場を提供してきた。参加学生の感想文からは、海外研修に参加することによって得られた経験が視野の広がりや意識の変化に結び付いていることを読み取ることができ、さらに、学生たちが海外研修に求めているものも知り得ることができた。このような経験から、本学学生へ

海外研修の場を提供することにより、異文化体験を通して様々な価値観、考え方、共通点などを認識し、知りたい・学びたいという気持ちを導き出し、「学ぶことの面白さ」を実感してもらえればと思い、今回のラオス海外研修を企画し実施した。

II. ラオス海外研修

(2019年9月8日～9月15日)

今回の海外研修は、①開発途上国の健康問題や保健医療システムを理解する、②臨床検査や医療体制の現状から課題を考え、現地の医療従事者と意見交換を行う、③臨床検査技術職としての専門性および国際感覚を養う、④異文化体験を通し、日本との相違を認識・体感することで、グローバルな視点を養うことを目的とした。

事前学修の前に、引率教員2名が参加学生8名(3年生)へ日程、研修内容、滞在に関わる準備・注意事項などのオリエンテーションを行った。

1. 事前学修

学生達はラオスの概要、保健医療の現状、文化、習慣などについての情報を収集し、意見交換を通じてラオスについて学修した。その後、学生達は3つのグループに分かれ、ラオス保健科学大学医療技術学部教員への発表準備を行った。また、学生の業務分担を明確にし、それぞれの担当(①会計、②スケジュール確認・点呼、③宿泊、④お土産)について準備を行った。

* 山陽女子短期大学臨床検査学科 [§]hando@sanyo.ac.jp

2. 研修内容

教育施設、研究所、病院（首都・地方都市・農村部）、国際協力機関、NPO 団体を訪問・視察し意見交換を行った。また、現地の文化・習慣・風習を体感するために現地住民の家庭や市場を訪問し、村での仏教行事に参加した。以下に主な研修内容を記す。

- 1) ラオス保健科学大学医療技術学部では、ラオス教員による医療技術学部の紹介が行われ、その後、本学学生が①日本と広島、②山陽女子短期大学、③日本の臨床検査の現状を英語で発表した(写真1)。この大学は、ラオス唯一の臨床検査技師養成施設であるため、ラオスの教員が興味を示したものは、日本における臨床検査技師養成に関わる教育システムや臨床検査の現状であった。
- 2) JICA ラオス事務所では、JICA 事業、医療事情、ラオス保健省が目指している 2025 年までのユニバーサル・ヘルスカバレッジ達成を目指した支援や JICA ボランティアに参加するために必要なこと、参加方法などについて意見交換を行った。
- 3) パスツール研究所では、JICA ボランティア（臨床検査技師）からラオス国内のマラリア対策の説明を受けた。彼は、大学院を休学しラオスに赴任していたため、ここに至る経緯、ラオスでの生活、任期終了後の予定なども話していただいた(写真2)。



写真1 ラオス保健科学大学での発表の様子

- 4) その他の訪問・視察など：NPO 法人 ISAPH では、農村部で行われている医療支援および昆虫食プロジェクト活動の説明を受けた後、県病院と郡病院の視察を行った。首都においては、国立マホソット病院、国立ミタパーブ病院、ビエンチャン特別市立セタティラート病院、赤十字血液センターを視察した。
- 5) 異文化体験：村で行われる行事に参加するため、地方都市の市場でラオスの民族衣装やお供え物の果物・菓子などを購入した。この市場で働いている人は、現地語で学生に対応していたため、学生は身振り手振りや絵を描いたりして購入したい物を伝え、電卓を片手に値段交渉をするなどしていた。農村部では、先祖供養行事に参加し(写真3)、その後、村人とタケノコ狩りへ行き(写真4)、収穫したタケノコを使った料理やパイヤサラダをラオス人と共に作った。

3. 事後学修と成果発表

帰国後、海外研修に参加した学生には、感想文の提出を必須とした。また、在校生への帰国報告会で、研修内容と学修成果の発表を行った。

III. 学修効果

学生の感想文と帰国報告会を通して、ラオスの健康問題や医療システムを理解し、どのようなアプローチが保健医療の改善に結びつくかなど



写真2 パスツール研究所での講義聴講の様子



写真3 托鉢の様子



写真4 タケノコ狩りへ向かう様子

を考える力が、研修前と比較すると明らかに向上していると感じた。また、現地の医療従事者との意見交換や異文化体験という貴重な経験は、日本との相違点などを見出すきっかけとなり、日本や国際社会に対して多方面から物事を考えることのできる、つまり視野を広げる良い機会になったと思われた。

IV. ま と め

多くの施設を学生たちに見てもらいたいという気持ちから、時間に追われる研修内容となった。学生からは、もう少し時間に余裕をもって見学や質疑応答・意見交換を行いたかったとの意見があったため、今後は、訪問先の数を調整し、参加学生の希望を取り入れた研修先を検討する予定である。一方で、視察・訪問依頼をしたすべての施設から受け入れを快諾していただいたため、今回得られたラオスの大学教員や医療施設職員とのつながりも大切にしていきたいと思う。今回の

研修では、ラオス人の学生たちと交流をする時間を設けることができなかつたため、今回は、学生同士が交流できる時間を優先し、日程調整を行いたい。また、学修効果や学修評価の指標が明確ではなかつたため、今後はルーブリック評価なども取り入れ、学修目的と評価軸を事前に学生へ明示する必要があると考える。

最 後 に

今年度はコロナ禍で海外研修を中止せざるを得なかつたため、現在、その代替えとなるようなオンライン海外研修(海外研修疑似体験)なども検討している。海外研修の再開を願いつつ、渡航できないこの期間に、学生にとって学び多い海外研修となるように、次回の研修に向け準備を行いたいと思う。

研修実施にあたり、訪問・視察を受け入れていただきました大学や施設の教職員の皆様から感謝いたします。